建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌［リクシル・アイ］

LIXIL eye

29
JULY
2023

特集

建築のまちを旅する 17

高知・室戸

漆喰、木材、和紙——
土佐の風土に育まれた伝統と技が現代に活きる

JULY 2023
no.29

LIXIL eye

［リクシル・アイ］

表紙の写真

吉良川町の古民家〈松本家住宅〉の表蔵

高知の伝統的な民家の特徴である土佐漆喰と水切り瓦が使われている。暴風雨に対する防水性を高めるために軒裏を含めすべてを漆喰で塗り固め、さらにこの漆喰壁を保護するため、雨水を手早く地面に落とす水切り瓦を壁面に数段設ける。土佐漆喰は海藻糊を入れないので塗るのが難しく、左官の腕が試される。水切り瓦の目地は漆喰をかまぼこ型に盛り上げて埋めるが、瓦の端は、地元で「ツノ」と呼ばれるように、角（つの）状にとがった装飾的な収まりとなる。出隅でより長くとがるものは、高度な技が施された証しだ

［写真：小松正樹］

左写真

〈土佐山田の舎（や）／Gallery樹下（こした）の舎（や）〉茶室の壁

設計｜聖建築研究所

建築家の山本恭弘氏が主宰する聖建築研究所の事務所兼ギャラリーは、自身が育った家を改修。1階茶室の中庭側では開口部の半分をコンクリートブロックの壁でふさぎ、外側に土佐和紙を張り、穴あきブロックの飾り棚越しに柔らかい光が入るようにした。「漆喰かまぼこ目地」仕上げは山本氏のオリジナル。穴あきブロックがまだらに白いのは白華現象。1990年の最初の改修時に、コンクリートブロックの壁を建物正面から奥の中庭まで斜めに貫通させて既存建物の平面構成を刷新。「現代的な材料を古い建物に取り込みたいと考えた。コンクリートブロックはその代表格」と山本氏は語る

［写真：小松正樹］

LIXIL eye no.29
2023年7月20日発行

発行｜株式会社LIXIL
編集発行人｜對馬儀昭
LIXIL Housing Technology
営業本部 TH統括部
〒141-0033
東京都品川区西品川1-1-1
大崎ガーデンタワー 24階
Tel: 050-1790-5838
Fax: 03-4363-6434
制作｜株式会社フリックスタジオ
デザイン｜株式会社ラボラトリーズ
印刷｜竹田印刷株式会社

＊本記事の無断転載を禁じます
＊本文中の敬称は省略させていただきました

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/

CONTENTS

特集

04 **建築のまちを旅する｜17**
高知・室戸

06 **テーマ1**
漆喰、木材、和紙――
土佐の風土に育まれた伝統と技が現代に活きる
ナビゲーター｜**山本長水**

10 土佐山田の舎／Gallery樹下の舎／土佐和紙工芸村くらうど／
オーベルジュ土佐山／称名寺（しょうみょうじ）本堂

14 **テーマ2**
地域型の家づくりを先行した「土佐派の家」の活動

16 高知・室戸建築めぐり

22 **住宅クロスレビュー｜17**
都市住宅を住み継ぐ
東 利恵「塔の家」（設計｜東 孝光）×**六角美瑠**「クレバス」（設計｜六角鬼丈）

32 **建築家の〈遺作〉｜14**
高橋靖一（ていいち）「S.F.S.21」
談｜**高橋 真**

36 **新世代・事務所訪問｜17**
ウミネコアーキ
ナビゲーター｜**門脇耕三**

44 **構造家の新発想｜17**
身近な素材と技術を使う
荒木美香

48 **触覚デザイン｜14**
大谷幸夫の手すり
ナビゲーター｜**笠原一人**

52 **土木のランドスケープ｜17**
松原市民松原図書館（読書の森）
ナビゲーター・文｜**八馬 智**

58 **TOPICS**
Z世代向け コンセプト住宅づくりワークショップ
文｜**河原 諭**

60 **INFORMATION**
LIXILビジネス情報サイトのご案内／LIXILからのご案内／展示のご案内

64 **紙上の建築｜17**
記録と再生を司る環境球
FICCIONES

特集 建築のまちを旅する 17

高知・室戸

高知は建築にその風土が色濃く反映されているまちだ。
なかでも、土佐漆喰と水切り瓦、木材、和紙といった素材と技術に着目してみる。
そのとき筆頭に挙がるのは、「土佐派」の建築だ。
伝統工法を再評価し現代建築に活かしてきた建築家が活躍している。
高知でしばしば見られる漆喰の利用は、暴風雨対策と密接な関係があるひとつの地域性の現れだ。
特に雨が多く風も強い東部の室戸地方にはその伝統的なまち並みも残るため、
今回は室戸方面まで足を延ばした。

土佐漆喰の壁に水切り瓦を付けた、高知の伝統的な民家が軒を連ねて残る吉良川町のまち並み。土佐漆喰は軒裏の隅まで施してある。壁に数段、水平に取り付けられている小型の瓦が水切り瓦だ。吉良川町は室戸市の西部に位置し、まちの中心部の東西750m、南北250mほどの区域が1997年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。独特の景観のなかでどの家も昔ながらの日常が営まれ、活きたまち並みを体感できる。写真中央は御田八幡宮（おんだはちまんぐう）の参道で、この通り沿いに見学の拠点施設「まちなみ館」がある［写真：小松正樹］

テーマ1

漆喰、木材、和紙——土佐の風土に育まれた伝統と技が現代に活きる

取材・文｜長井美暁
写真｜小松正樹（特記以外）

ナビゲーター｜山本長水（山本長水建築設計事務所）

森林県で木材資源が豊富なことに加え、土佐漆喰のような土着の技術が育まれた高知。独自の技術が生まれたのは気候風土の厳しさゆえである。長く伝わるものに意義を見出し、現代の建築に活かしていく。40年ほど前に高知で起こったその動きは「土佐派」と呼ばれ、職人たちも活気づけた。しかしいま、職人の減少など先行きは決して明るくない。
今回の旅では、室戸市吉良川町の重要伝統的建造物群保存地区を訪ねて高知独自の伝統技法を見るとともに、高知建築界の重鎮で「土佐派」を代表する山本長永（ひさみ）氏に風土に根づくことの大切さを聞いた。

01｜はりまや橋商店街 木造アーケード
高知県建築士会が市内中心部の商店街活性化のためにアーケードを木造にしようと提案したのが受け入れられ、艸建築工房と西森啓史建築研究所の設計により1998年に完成。木造によるアーケードは日本初の試みということもあり、構想から実現まで6年かかった。県産スギの150㎜角材を組み合わせ、木組みの美しさを表現。45分耐火性能を有する燃えしろが加味された部材設定がなされている。屋根はポリカーボネート板葺き

02｜池田家住宅／蔵空間 蔵宿（くらじゅく）
吉良川町で炭問屋を営んでいた池田家の蔵。蔵は現在は宿泊施設として活用されている。なまこ壁による腰壁の上は軒下まで土佐漆喰で塗り固められ、各面に水切り瓦を3–4段、水平に取り付けている。土佐漆喰と水切り瓦は高知の伝統的な民家の特徴で、吉良川町にはそれが多く残る

観光名所のひとつである「はりまや橋」周辺は高知市で一番の繁華街で、路面電車も路線バスも空港バスも止まる。高知駅からも歩いて10分ほど。はりまや橋は高知の民謡「よさこい節」にも「土佐の高知のはりまや橋で坊さんかんざし買うを見た」と歌われる。昭和30年代にはこの一節を歌詞に引用した歌謡曲が大ヒットし、広く知られるようになった。とはいえ、もともとは堀川を挟んで隣り合う商家が互いの行き来のために架けた私設の橋だったこともあり、それほど大きなものではない。いま見られる朱塗りの欄干の太鼓橋は周辺整備事業により1998（平成10）年に復元された。

はりまや橋周辺にはアーケード商店街がいくつかある。そのなかで「はりまや橋商店街」の木造アーケード01が目を引く。全国的にも珍しい木造アーケードは、高知が全国屈指の森林県であることを誇るものだ。県土の84％を林野が占め、その森林率は全国1位。人工林率も全国2位と高く、ヒノキやスギの産地として昔から林業が盛んである。

厳しい気候風土から家を守る先人の知恵

高知県は東西に細長く、東の室戸岬と西の足摺岬の間に土佐湾を抱き、“海の国”のイメージが強いが、実は平地の少ない“山の国”である。このことは高知市内から東に車を走らせるとよくわかる。海沿いに延びる国道は片側にすぐ山が迫るのだ。

土佐湾を挟んで弓状の地形のため、湿った気流が流れ込みやすく、全国で最も降水量が多い地域のひとつである。大粒の雨が強く降り、地面からの跳ね返りで足元が濡れることが多いため、昔から俗に「高知の雨は下から降る」といわれている。

東方に向かったのは、室戸市吉良川町の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）を見るためだ02・03。ここには土佐漆喰や水切り瓦04が使われた伝統的な民家が多く残る。吉良川町は古くから農林業が盛んで、近世には木材や薪の集散地として栄えた。明治に入ると近郊に繁茂するウバメガシから備長炭の生産が始まり、良質な土佐備長炭は海路で京阪神に運ばれ、帰りの船には日用品などを積み、その交易でまちは昭和初期にかけてますます繁栄。そうした経済力を背景に、土佐漆喰や水切り瓦を用いて雨仕舞いに配慮した堅牢な家屋が建てられ、いまに残るまち並みが形成された。

吉良川町の重伝建地区のまち並みは2つに分けられる。旧土佐街道沿いで海岸に近い「浜地区」と、その北側のやや高台に広がる「丘地区」で、両者には異なる性格が見られる。浜地区の屋敷は土佐漆喰による塗屋造（ぬりやづくり）で、水切り瓦を用いて、「厨子（つし）二階」の町家形式で建てられている。塗屋造は建物外部の柱や窓枠などを大壁造として土や漆喰で塗り籠めるものだ。一方、丘地区の屋敷は軒を低く抑えた平屋建てで、「いしぐろ」05と呼ばれる石垣塀を周囲に巡らせ、その佇まいはどこか農村の民家のようでもある。

室戸は“台風銀座”の異名をもつように、台風の襲来が多い。土佐漆喰と水切り瓦はその対策として、強い風雨から壁面を守るために発達した独自の技法だ。土佐漆喰が本漆喰よりも雨水に強い秘密は、素材や製法の違いにある。本漆喰は作業性を上げるために保水力や粘りの出るツノマタやフノリなどの海藻糊を添加する。しかし糊は、ここ高知では長時間の雨水による溶出劣化につながるので、土佐漆喰では使わない。本漆喰で入れる麻スサの代わりに、藁スサを発酵させたものを入れて、その糖分で粘性を出しながら練るのだ。糊を用いない分、本漆喰に比べて施工の難易度は高く、「水ごね10年、糊ごね1年」と言われるように、左官の技を習得するのに長い年月を要する。

そもそも土佐漆喰の耐候性の高さは、厚塗り（上塗り5－7㎜）できるところにある。漆喰の経年収縮が小さく、ひび割れしにくいからだ。理由は、ひとつには収縮する糊は使わないこと。もうひとつは伝統の土佐塩焼き石灰自体の収縮が小さいことにある。土佐塩焼き石灰も、特有の徳利型の土中竈（どちゅうがま）を用いた伝統的な製法でつくられる。

一方、水切り瓦は壁面に小さな瓦を庇状に数段取り付けるものだ。壁面に伝う雨滴を断ち切って地面に落とし、漆喰壁を保護する働きがある。施工の手間がかかることから富の象徴でもあり、豪奢な家ほど段数も多い。

丘地区の「いしぐろ」も、風当たりがより大きい高台にあって、強風から家を守る。丸い浜石や河原石を半割りし、その小口を外面に見せながら積み上げて塀とし、それが独特の景観を生み出している。これも土佐漆喰や水切り瓦と同じように、厳しい自然環境のなかで暮らしてきた先人たちの知恵の現れである。

伝統的に使われてきた材料は“息をする”

よく見ると、どの家も軒の出が少ない。「深い軒は雨を防ぐにはいいけれど、台風には弱い。強風で吹き上げられてしまう。室戸岬の周辺は風が強いので軒をあまり出さず、軒裏まで漆喰で塗り固めています」。今回のナビゲーターである建築家の山本長水氏はこう説明する。

「ちょうすいさん」の愛称で多くの人に慕われる山本氏は、土佐漆喰をはじめとする土着の材料が高知の風土にいかにふさわしいかに早くに気づき、その伝統を活かした建築づくりを推進し、高知の建築界に多大な影響を与えた。山本氏を中心とする「土佐派」が名乗りを上げたのは1980年代半ばのことである（関連14ページ）。

山本氏は高知県南国市の林業を営む家に生まれ、日本大学で建築を学んだのち、東京の市浦建築設計事務所で実務の経験を積んだ。30歳を迎える前に故郷に戻って建築の仕事を始めたが、高知のように高温多湿な土地に“息をしない”材料は合っていないとすぐに実感した。「たとえばコンクリート打ち放しの壁に結露でカビが生える。漆喰との違いがはっきりわかるほど、高知は厳しい気候風土だということです」。

息をする材料、すなわち吸放湿性を備えるという点から、山本氏は漆喰をはじめ木材や和紙など高知の建物に伝統的に使われてきた材料への関心を高め、それらの特性を研究しながら、自ら設計する建物で積極的に採用した。そのころすでに建物の内外装仕上げに土佐漆喰が選ばれることは少なくなっていたが、職人の技術としてはまだ生き残っていたから、左官職も二つ返事でやってくれた。土佐漆喰は、最初は黄色みを帯びているのが時間の経過とともに白くなる。「100年くらいたつとこうなるという見本がいくらでも身近にあるのは幸いでした」と語る。

山本氏のこの動きは高知の建築家たちを触発し、やがて「土佐派」と呼ばれるグループが誕生する。そして「土佐派」の建築家たちの志により土佐漆喰が復活したことで、左官職たちが元気づけられるという効果もあった。漆喰仕上げは人の影が映るくらい、鏝（て）で磨くのが理想といわれる。磨き込むうちに表面が密実になり耐候性が高まるのだ。手間はかかるが、左官職の腕の見せどころでもある。

山本氏が高知に帰ったころは、土佐和紙も建物

03｜武井家住宅（左）と細木家住宅（右）
1911年に建てられた武井家は、妻側の壁が煉瓦の長手積み組積造。煉瓦は当時の新しい西洋文化として廻船が持ち帰ったものだ。土佐備長炭の集散地として栄えた吉良川町は、戻りの廻船に京阪神の物品を積み込むとともに、その文化も当地に運んだ。武井家は米穀商で、遠洋漁業も手がけたという。「厨子二階」の形式でつくられ、店（ミセ）部分の真上に天井の低い屋根裏部屋がある。細木家は格子戸の向こうにミセがあり、かつて呉服店が営まれていた

04｜水切り瓦
漆喰壁に瓦を小さな庇のように並べたもの。壁面の大きさにより2–4段取り付けられる。壁面に伝う雨滴を断ち切り、地面に落とすことで、漆喰壁を保護する働きがある。広い壁面の漆喰塗りは1日で終わらないため、職人の“息継ぎ”となる。また、広い漆喰壁が割れることを防ぐ意味もあるという。写真は、松本家住宅の表蔵

05｜いしぐろ
吉良川町の「丘地区」で各家の周りに築かれた防風のための石垣塀。丸い河原石や浜石を半割りにして小口を見せつつ、空積みや練積みといった方法でつくられている。塀の厚みは現在残っているもので30㎝ほど。この「いしぐろ」も吉良川のまち並みの特徴で、県東部の暴風雨地域では他にも多く見られる

06｜かたつむり山荘

山本氏が設計し、1969年に竣工。大豊町の山間に立つ。大黒柱から丸太の垂木が放射状に広がり、5間角の空間を包み込む。敷地の上を高速道路が通ることになり、築19年で近くに解体移築。JIA25年賞を2002年度に受賞。審査に当たった林昌二は「地産地消と過剰精度の否定という2つの視点から、時代的先駆性を感じた」と高く評価した［写真左：山本長水、写真右：西森秀一］

07｜高知県立中芸高等学校格技場

山本長水建築設計事務所の設計により1995年に竣工。15m×28mの無柱空間を県産のヒノキ材を使ったアーチ状の重ね梁で支えている。材同士にズレが生じないようにシャチ栓で止めるという特徴的なディテールをもつ。1999年に日本建築学会賞（作品）、2022年度にJIA25年賞を受賞

09｜高知学芸高等学校創立50周年記念体育館

上田建築事務所が設計を手がけ、2007年に竣工。鉄筋コンクリート造に木造屋根の組み合わせ。屋根はラメラルーフという木組みを面として扱う木造構法を採用し、ヒノキの集成材を使用。地上3階建てで延床面積が3,000㎡を超えるため、耐火構造において国土交通大臣の認定を受けた

10｜いの町 紙の博物館

上田建築事務所の設計により、土佐和紙の里・いの町に1985年に建てられた。切妻屋根が連続する形態が内部空間にも現れる。外壁は松煙を混ぜた黒漆喰、および石灰岩積みの白壁。内部の展示室は土佐漆喰による白壁、つなぎの場は黒漆喰が施された壁で構成

11｜高知県立美術館

日本設計・環境建築設計事務所・山本長水建築設計事務所の共同設計により1993年に竣工。美術館部分と多目的ホール部分の2ブロックで構成。土佐漆喰を施した外壁は美術館部分を白、多目的ホール部分を黒で塗り分け、鉛ステンレス複合板を水切り瓦のように取り付けている

08｜橋本大二郎

政治家（1947–）。NHKの記者やニュースキャスターを経て、第13–16代高知県知事を務めた。在任期間は1991年から2007年

には使われなくなっていた。土佐和紙は千年以上前からつくられ、薄くて丈夫という実用性と美を兼ね備えたものとして名高く、福井県の「越前和紙」や岐阜県の「美濃和紙」とともに、日本三大和紙に並び称される。主な産地のいの町では、清流仁淀川の恵みを受けながら楮（こうぞ）や雁皮（がんぴ）など原料の生産とともに製紙技術が発展し、明治初期には紙聖・吉井源太の手により極薄の「土佐典具帖紙（てんぐじょうし）」が考案されて栄えた。

「漂白されたパルプを使わない、伝統的な製法でつくられた土佐和紙は相当長持ちします」と山本氏。「障子紙は1年少々で黄ばんでくるけれど、伝統的な土佐和紙は日光の当たるところでも6、7年くらい使えるし、日光の当たらないところなら20年たっても平気でした。ただし、パルプが入っていたらそうはいかない。伝統的な土佐和紙は高価ですが、建物に使うなら、やはり長持ちするもののほうがいいでしょう」。

土佐和紙も「土佐派」が率先して使うようになった。当時は気骨のある紙屋がいて、その紙屋を指定すれば、間違いのない和紙が手に入ったという。経師屋にも山本氏ら「土佐派」の志をよく理解する人がいた。「私は高知で設計事務所を始める前に2年ほど工務店に勤め、出入りする職人と本音のやりとりを経験しました。そのなかに真面目な人がいて、のちの協働につながりました」。

地場の材料を
地場の職人の技術で

山本氏は、設計する木造建築では木の構造材を露出させるのが常だ。「木は空気中の水分を吸ったり吐いたりして室内の湿度環境をコントロールする好ましい材料だから、隠すよりも露出させるほうがいいと考えています。表に出したほうが木も息をしやすいでしょう」。

独立2年後に設計した「かたつむり山荘」[06]は、スギやヒノキの間伐材を製材せず、丸太のまま用いて主要構造とした建物で、壁に土佐漆喰、襖紙に柿渋引きの土佐和紙を使った。この山荘は山本氏の父が管理する造林地に現場事務所として建てられた。丸太を構造材としたのは、山中の敷地で足元に丸太がいくらでもあるのに、製材するにはトラックで運搬しなければならないからだ。それによって木材価格はぐんと跳ね上がる。だから山本氏は「そこにあるものをそのまま使おう」と思った。「地産地消」の先駆けといえるだろう。

山本氏はこのあと、戦後に植えられた小径木の活用方法を考え始める。時期的に間伐材が大量に出てくることが見込まれたからだ。思いついた「重ね梁」は、戦争中、兵舎などの大規模建築をつくるときに使われていた。山本氏はそれを金物に頼らず、伝統的な仕口で接合したいと思い、シャチ栓を打ち、隠れたところをボルトで留めるというやり方を積極的に進めた。重ね梁の技術研究は県の林業試験場（現・森林技術センター）でも間伐材の活用を目的に行われていたという。

「高知県立中芸高等学校格技場」[07]では造林間伐材の重ね梁を県内で初めて、住宅以外で試みた。ヒノキ材は105㎜角以上の断面になると節のある並材でも高価だが、105㎜角に満たないバタ角用材はスギ材並みに安価だ。このことから梁行き方向の材は、90㎜角のヒノキ材を緩やかに曲げながら3層重ねてジョイスト風の梁とし、求められたスパン15mに応えている。アーチ状の屋根架構は、普通なら集成材でつくるだろう。それを大工の技術で実現しようというのは「重ね梁の経験がなかったら思いつかなかったでしょうね」と山本氏。接着剤は使ったがクリープ対策として施すにとどめ、地場の大工でも可能なように接合面に堅木のシャチ栓を使って重ね梁をつくり、持論の「地場の材料を地場の職人の技術で使いこなす」ことを追求した。

木材の節は山本氏、さらに「土佐派」の建築家たちの作品に共通して見られる。木材は節の有無で値段が大きく変わる。無節がよいという価値観は昔からあるが、山本氏は「私の家もそうですけど、庶民の家では、表座敷以外の生活空間に節のある木が平気で使われています。でも、鴨居や敷居に節のある木が使われることはまずありません。こちらが何も言わなくても、製材屋は何に使われるかを考えながら挽くし、大工も適材適所で選びますからね」と話す。地場の職人たちへの信頼がうかがえると同時に、「土佐派」の建物がこうした職人たちの技術に支えられてきたことがわかる言葉だ。

住宅以外にも漆喰や木材を

高知県では豊富な森林資源を背景に、1990年代半ばから、学校や体育施設などの公共施設を木造でつくる「木の文化県構想」が推進された。木材振興を公約に掲げた橋本大二郎県知事[08]の時代だ。中芸高校の格技場が木造で建て替えられたのはその流れのひとつで、大きな木造屋根を架けた「高知学芸高等学校創立50周年記念体育館」[09]も、「土佐派」に属する建築家の上田堯世（あげたたかよ）氏の設計により建てられた。上田氏は土佐和紙の里・いの町では「いの町紙の博物館」[10]を設計。この建物では土佐漆喰に松煙を混ぜ込んでいて外壁が黒い。

「高知県立美術館」[11]にも土佐漆喰に松煙を混ぜた黒い壁がある。その壁は現在、灰色に近い。山本氏の子息・哲万（てつま）氏が「鏝で押さえるのが十分ではなかったため、長い間に松煙が雨で流れてしまったからです」というと、山本氏は次のように話した。「太平洋戦争の末期、民家の白い漆喰壁は目立って攻撃の対象になることを避けるために黒く塗っていました。終戦時に子どもだった私は、それを昔からあるものだと早合点してしまった。実際に黒い漆喰壁は昔からあったものの、それは内部の壁でした。私が選択を間違えてしまったというわけで、お恥ずかしい限りです」。

土佐漆喰や県産の木材、土佐和紙は、「土佐派」の建築家たちによって住宅のみならず公共施設などにも使われる舞台を広げ、現代建築にも十分に通用するものであることを世に示した。その代表例を続くページでもご覧いただきたい。山本恭弘（やすひろ）氏は土佐派を“脱藩”したが、「伝統的な素材や技術の根底には合理的な考え方がある」と、現代に活用する有効性を認めている。

こうした道筋をつくった山本氏の大きな包容力のもと、「土佐派」の建築家たちは技術的な情報を活発に交換して取り組んだという。コミュニティが小さいこともあるだろうが、高知の建築家たちは実に仲がいいのだ。とはいえ「土佐派の家づくりも実態は風前の灯です」と哲万氏。最大の理由は職人不足だ。たとえば、漆喰壁の下地となる竹小舞を編める職人は現在、高知市周辺では須崎市に80歳手前の夫婦のみ。「彼らが引退したら竹小舞がなくなるというので、左官職がその技術を継承しようとしています」。また、若い建築家に「土佐派」の考え方をどう伝えていくかも課題だという。「勉強会に父が呼ばれるなど、土佐派の家づくりに敬意をもってくれる若い人はいますが、それが実際の仕事に結びついているかというとなかなか難しい」。

しかし、今回の旅で出会った若い建築家やその卵たちは皆Uターン組で、言葉の端々から高知への愛着や誇りを感じた。昨今の大規模木造を推進する動きのなかでも高知は木造先進県として一歩先を行く。地域への愛情とともにそうした進取の気性が、伝統を活かし未来へと発展させる原動力になることを願う。

山本長水氏（右）と子息の哲万氏。祖父母の代の1910年に建てられたという自宅の庭にて。哲万氏は父と同じ建築設計の道に進み、「土佐派」の後継者としての活動に尽力する［写真：編集室］

山本長水　やまもと・ひさみ
1936年高知県長岡村（現・南国市）に生まれる。1959年日本大学工学部（現・理工学部）建築学科を卒業後、市浦建築設計事務所に勤務。1964年高知に帰り、猪野工務店に勤務。1966年に山本長水建築設計事務所を設立。「高知県立中芸高等学校格技場」で1999年に日本建築学会賞（作品）を受賞。高知県建築設計監理協会会長や日本建築家協会四国支部長、日本建築学会四国支部長などを歴任。

長井美暁　ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

MAP 3
13

土佐山田の舎（や）／Gallery樹下（こした）の舎（や）

1990年改修、2002年増築

設計｜聖建築研究所

伝統に現代を重ねる古民家再生の先駆例

聖建築研究所代表の山本恭弘氏が、自身が育った香美市土佐山田町の家に改修や増築を重ね、設計事務所兼ギャラリーに刷新。地域再生への展開も意図する。

既存建物は築100年を超えていた。1990（平成2）年の1度目の改修ではこれを減築したうえで、コンクリートブロックの壁を建物正面から奥の中庭まで斜めに貫通させ、新設のギャラリー空間と母親の居住空間を明確に分けた。この斬新で大胆な手法は注目を集め、多くの建築家に刺激を与えた。一方で、2000（平成12）年には国の有形文化財に登録された。

2002（平成14）年の改修では中庭の奥にギャラリー空間「樹下の舎」を増築し、渡り廊下も新設。2020（令和2）年にはギャラリーを兼ねた縁側空間を中庭に設けた。少しずつ手を入れたり、空間の使い方を変えたりしてきて、来訪者からは来るたびに変わっているといわれるが、「まだ完成ではない」と山本氏は話す。

「改修は天職」と語る山本氏は、1980年代に古民家の増改築を2軒手がけた際、「伝統に現代を重ねる」ことに目を開いた。その2軒のクライアントには「育ててもらった」と感謝の念をいまも忘れない。

1

2

3

4

5

1 道路側のギャラリー空間の2階。天井の片側は断熱材を入れるために合板を張った
2 続き間を仕切る壁の上部に落とし掛け。奥に見えるのはコンクリートブロックと土佐漆喰による塀
3 茶室。左側のブロック塀が建物正面から斜めに貫通しているもの。その手前は床の間に見立てている
4 中庭の奥に増築されたギャラリー空間。キンモクセイの大木を避け、半円形のガラストップライトにした
5 ギャラリーを兼ねた縁側空間には、山本氏が開発した瓦や、これまでに試作したものなどを展示

1

MAP 3
06

土佐和紙工芸村くらうど

1995年

設計｜上田建築事務所

伝統的な材料と現代的な空間の対比

土佐和紙の産地として知られるいの町につくられた施設。レストラン棟、紙漉実習棟、薬湯棟、宿泊棟など計8棟の新築建物のほか、町内各地から移築された民家と蔵がそれぞれ3棟ある。「紙の博物館」の補完施設という位置付けで、紙業の振興と観光の拠点、また、中山間地域の活性化を目的とする。「紙の博物館」と同じく上田堯世氏が率いる上田建築事務所が設計を手がけた。

清流・仁淀川に面して施設の顔となるレストラン棟は鉄筋コンクリート造だが、土佐漆喰塗りの外壁をもち瓦葺きの切妻屋根が載る。外壁の一部は漆喰の材料のひとつである石灰石積みとし、石灰石は内部にも一部現れる。レストラン棟の奥には紙漉実習棟、薬湯棟、宿泊棟が渡り廊下で結ばれて続く。紙漉実習棟の外壁は土佐漆喰塗り、薬湯棟はコンクリート打ち放しと金属板。土佐の恵みともいえる伝統的な材料と、工業製品による現代的な材料が、さまざまな場面で対比を見せる。さらに、移築された建物群は技の蓄積と長い時間により洗練され安定した姿を見せ、新築された建物群にも品格を与えつつ、これも対比を生み出す役割を果たす。この対比という概念により、渾然一体とした施設をひとつのものにまとめ上げている。

2

3

1 施設全体のエントランスホールでもあるレストラン棟のホール。切妻屋根の形状が内部空間にも現れている
2 紙漉実習棟。屋根の棟飾りはステンレス製
3 移築された蔵は3棟とも明治期に建てられたこの地方のもの。壁面に水切り瓦を有する

MAP 3
10

オーベルジュ土佐山

1998年

設計｜細木建築研究所

土佐の材料を用いた斬新な空間で地域の恵みを味わう

高知市街の北側に広がる山間、鏡川上流域に立つ。地域の過疎化・高齢化に対する危機感から住民が立ち上がり、10年にわたり何十回もワークショップを重ねて生まれた宿泊施設だ。客室は12室と、吊り橋を渡った対岸にヴィラが4棟。共用部としてレストランと温泉を備える。

設計を手がけた細木茂（ほそぎしげる）氏は「土佐派」に属する建築家で、この施設では地域性が大事だと考え、土佐派の家づくりの手法をベースに地域の材料を使いながら、新しさを感じる空間を目指した。細長い傾斜地にあって2階にロビーフロアを配し、1階をアプローチレベルより下げてボリューム感を抑え、また、各ゾーンを分棟化し、自然の中の環境に合ったスケール感を保っている。

木造・一部鉄筋コンクリート造の混構造で、ロビー空間は円弧を描くコンクリートの壁と、これに対面する木製カーテンウォール、そして立体的な方杖で支持された木造の小屋組から成り立つ。控え柱を伴うコンクリート壁は各方向の水平力を負担し、窓際のV字柱はコンクリート壁上部の方杖の部材と登り梁を介して一体化することで小屋組のねじれに抵抗。構法の工夫により、木造の軽快な骨組みを見せながら開放的な空間を実現した。

1

2

1 左手がロビーやレストランのあるセンター棟、右手は宿泊棟。屋外廊下で両者を結ぶ。手前は谷側に張り出すテラス
2 川に平行する東西軸の上流側に設けられた温泉棟。登り梁と方杖を組み合わせた和傘のような構造で、中央部にトップライトと湯気抜きを設けつつ、開放的な空間を実現。桁はスギの2段重ね梁
3 木造カーテンウォールから周囲の緑を取り込んだ開放的なロビーフロア。左手のコンクリート壁は、窓の外の緑を抱くように緩く円弧を描く

3

MAP 5
17

称名寺本堂（しょうみょうじ）

2001年

設計｜山本長水建築設計事務所

響きのよい、木架構現しの大空間

貫構造による格子状の壁が内陣と外陣を緩やかに分け、東大寺南大門の挿肘木（さしひじき）構法にならったという籠状の肘木が視覚的なリズムを空間に与えている。内陣と外陣に分かれるところの真上にはガラス瓦を用いたトップライト。山本長水氏は「天から降り注ぐ光のもとにご本尊が浮かび上がる姿が大事だと思った」と語る。大断面長尺の集成材を使えば楽にできる構造だがスギ材を用いて、法的な荷重範囲は水平力を引張りブレースで負担させ、仕口には圧縮力のみがかかるようにした。これを超える大きな力に対しては籠状の骨組みが対応する。この骨組みは小径木でできており、山本氏は「木を編む」と表現する。

天井を張らず、木架構をすべて見せるこの大空間が生まれたのは「声が響く木造」を望まれたことが理由だ。重量のある土佐漆喰塗りの壁で取り囲み、読経や鐘の音が心地よく伝わる音環境を実現した。漆喰壁は伝統的に中央が少し膨らんでいるので音が乱反射する。ここの音の響きを気に入ったアカペラ歌手が何度もライブを行っているという。木材はベンガラを塗って朱色とし、非日常な空間になることを意図した。

トップライトからは太陽の光だけではなく熱も入る。太陽熱はエアダクトで床下に導かれ、冬季の暖房と梅雨時の乾燥に使われている。木材や漆喰壁に囲まれる空間は大きな潜熱容量があり、さらに床下の土間に苦汁（にがり）を入れて安定した温湿環境を得ている。

1 入り口側の開口部の障子は、土佐和紙による障子紙の外側に、柿渋引きの和紙を火灯形に切り抜いて貼っている。昼間は火灯窓、夜は普通の障子窓になる
2 内陣方向を見る。トップライトには室内側に木製可動ルーバーが付いている
3 屋根勾配を生かした構成。前住職と山本氏は茶道の仲間。設計当時は副住職だった現住職は「こだわらない、とらわれない、というのが仏教なので、形にもとらわれる必要はない」と話す

1

2

3

テーマ2

地域型の家づくりを先行した「土佐派の家」の活動

取材・文｜磯 達雄

高知県産のスギ材を現しで用い、土佐漆喰や土佐和紙などの伝統的な材料を積極的に使いながらも、現代的な家づくりを目指した「土佐派の家」。その活動は、ひとりの建築家や企業が主導したものではなく、建築家たちの親密なつながりから興り、メディアや行政による後押しがあって、地域に広まった。全国的に見てもユニークな地域主義の建築づくりの発展過程を振り返る。

「土佐派の家」の特徴は、県内産のスギ材、土佐漆喰、土佐和紙など、地域の伝統的な材料や工法を積極的に使うことにある。1980年代の半ばころから、こうした建築づくりを志向する建築家たちが現れ、山本長水氏が会長を務めていた社団法人高知県建築設計監理協会のなかで、これを推進する動きが活発化していった。

ひとつの大きなきっかけは、1986（昭和61）年に高知県住宅供給公社が開催した住宅設計コンペだった。高知市の郊外で新たに開発される横浜ニュータウンで、県内限定の公開コンペ上位入選作から6戸と、建設省（現・国土交通省）主催「いえづくり'85プロジェクト」の地元入選案1戸を、モデル住宅として建設することとなった。このときに建てられたのが、山本長水氏、上田堯世氏、山本恭弘氏、細木茂氏、松澤敏明氏らが設計したもので、それらはいずれもスギ材や土佐漆喰を使った家だった。

これらの作品を紹介する記事が雑誌『新建築住宅特集』の1986年11月号に載ると、翌月号の月評で建築史家の村松貞次郎が「土佐のカツヲのタタキのように生身で生き生きして」いると高く評価し、さらに翌年3月号では山本長水氏と細木茂氏による別の作品に対して、「土佐派」の呼称を使って評した。以来、この呼び方が普及することとなる。

県知事も活動を後押し 書籍の発行で活動を広める

1994（平成6）年、建築設計監理協会のなかに「土佐派の家委員会」が発足する。メンバーは28名。「土佐派の家」に則した住宅を設計するだけでなく、研究的な活動も行った。グループには、行政や高知県木材協会、高知放送なども加わり、地域の伝統的な材料を使った新しい家をつくり、これを広めていこうとする体制が少しずつ整っていく。

そして、当時、高知県知事だった橋本大二郎が土佐派の家の趣旨に共感し、県産品を売り出すために立ち上げた第3セクターの株式会社高知県商品計画機構が販売をマネジメントするようになる。「土佐派の家」を商標登録し、「土佐派の家づくりセミナー」の開催や、土佐派の活動を広く伝える書籍『土佐派の家』も発行した（発行：ダイヤモンド社、PART1：1995年、PART2：1996年）。

「土佐派の家」の建築家たちは、民間の戸建て住宅や公営住宅の設計にいそしんだ。1997（平成9）年には、東津野村（現・津野町）で船戸定住団地が建設される。このときは、設計の依頼を受けた高知県建築設計監理協会会長の上田堯世氏（当時）が、1棟ごとの設計を土佐派の家委員会のメンバーにそれぞれ割り振ることにより、「土佐派の家」の多様性と、そこに共通する本質について、理解を深める契機となった。

全国で取り組まれた地域型住宅 そのユニークな成功例として

その後、高知県商品計画機構が解散することとなり、その商標を受け継ぐ団体として土佐派の家ネットワークスが2009（平成21）年に立ち上がった。この組織には、「土佐派の家」を設計する建築家と、地域の信頼できる工務店や林業会社、左官、経師屋、瓦屋などの職人が参加した。結成時の建築家メンバーは、上田堯世（上田建築事務所）、太田憲男（アクシス建築研究所）、細木茂（細木建築研究所）、松澤敏明（徳弘・松澤建築事務所）、山本長水（山本長水建築設計事務所）、西森啓史（西森啓史建築研究所）の6氏。このうち、西森氏が死去して、現在は5名となっている。

「土佐派の家」の活動が始まった1980年代は、地域性を備えた優れた住宅づくりを推進するHOPE計画が進められた時期でもある。HOPEとは「Housing with Proper Environment」を略したもので、建設省の補助事業として1983（昭和58）年に始まり、全国各地の市区町村で展開された。高知県内でも、伊野町（2004年に合併し、現・いの町となる）、佐川町、梼原町などで進められている。これらのまちの計画にも、「土佐派の家」のメンバーは関与してきた。西森氏と太田氏が設計した、佐川町での公営住宅づくりがその一例である。

HOPE計画は、地域型住宅の意義を広めるうえで大きな貢献を果たしたが、すでに役割を終えて、現在は各市区町村が定める住宅マスタープランのなかにその考え方が盛り込まれるようになっている。地域型住宅の考え方が普及した半面、地域ごとに特徴のある活動は見えにくくなっているようにも感じられる。

一方「土佐派の家」の活動は、建築家が主体的に取り組む活動として、いまもなお継続し、そのブランドは、依然として高い訴求力を保っている。

「土佐派の家」について、建築編集者の中谷正人氏に聞いてみた。氏は「土佐派」誕生のきっかけとなった『新建築住宅特集』の元編集者であり、のちに書籍『土佐派の家』の編集も担当した。

「伝統的な材料や職人の仕事と現代の建築を結び付けた。地域性を建築に取り入れる動きとして、全国を見渡してもこれほど成功したものはない」。

地域主義の建築をつくる運動として、「土佐派の家」の活動は歴史に名を残すものであり、これからも注目されることだろう。

1–3 高知県南国市「県営住宅十市団地木造棟3階建て」（設計：山本長水建築設計事務所、竣工：1998年）。いぶし桟瓦を切妻の屋根に載せた木造3階建ての公営集合住宅。妻面の土佐漆喰壁には銅板製の水切りを付けている
［写真：西森秀一］

1

2

3

4

5

6

4–6 高知県高岡郡南佐川町「佐川町公営住宅・三野団地」（設計：西森啓史建築研究所・アクシス建築研究所、竣工：2000年）。木造2階建ての公営集合住宅。佐川町が進めていたHOPE計画によるマスタープランに基づいて建てられたもの。高齢化への配慮と住戸同士のつながりを意識してスロープによる回遊動線が設けられている。佐川町では、1992–1994年に東元町団地、花の木団地、古市団地などで、2000年に三野団地、2008年には荷稲団地で「土佐派の家」の手法による町営住宅が実現した
［写真：西森秀一］

磯 達雄 いそ・たつお
建築ジャーナリスト／1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988–1999年日経アーキテクチュア編集部に勤務。2002年－2020年3月フリックスタジオ共同主宰。2020年4月よりOffice Bungaを共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

高知・室戸 建築めぐり

KOCHI·MUROTO

参考

- 絵金蔵運営委員会 編著「赤岡まちづくりの記録」絵金蔵運営委員会、2005
- 建築家会館 企画、山本長水＋山本長水の本をつくる会 編著『建築家の土着：地域の知恵と「土佐派の家」の仲間たち』建築ジャーナル、2016
- 『建築文化』彰国社、1990.7、1992.1、1994.3、2000.2
- 高知県建築設計監理協会 監修、中谷ネットワークス 編『土佐派の家 PART2「技と恵」』ダイヤモンド社、1996
- 高知県建築設計監理協会 監修、中谷ネットワークス 編『土佐派の家：100年住むために』ダイヤモンド社、1995
- 高知新聞社編集局 企画・編『近代・すまい散歩：土佐の名建築』高知新聞社、1994
- JIA（公社）日本建築家協会 四国支部 著『建築巡礼 四国88カ所ガイドブック vol.2』南の風社、2014
- 『新建築』新建築社、1970.3、1985.8、1988.12、1990.12、1992.1、1995.8、1998.6ほか
- 『新建築住宅特集』新建築社、1986.2、1997.6
- 土佐派の家ネットワークス ホームページ（https://tosaha.com/）2023.5.29アクセス
- 文化庁 国指定文化財等データベース（https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index）2023.5.29アクセス
- 室戸市ホームページ「吉良川のまちなみ」（https://www.city.muroto.kochi.jp/pages/page0333.php）2023.5.29アクセス

おことわり
04–21ページの作品名称は文化財指定・登録名称とし、
ほかは原則として2023年6月時点の施設名称を使用しています。

高知県は風土に根ざした伝統建築、現代建築が見られる地域だ。「土佐派」の建築をはじめとして、土佐漆喰、土佐スギ・ヒノキ、土佐和紙が使われている建築が点在する。今回は高知市を中心にその名作をめぐってゆこう。地域素材の代表格土佐漆喰は、暴風雨対策の伝統であった。随所で見られるが、特に暴風雨の激しい県東部に漆喰民家が多く残されており、室戸方面まで建築めぐりを延長してみる。

東部で土佐漆喰の伝統民家がまち並みとして残されているのが吉良川町。名家が少しずつ改修を重ねながら日常を営んでいる。ここは明治期以来、土佐備長炭の特産地として栄えたまち。そのとき形成された商家や廻船問屋の家屋が残り、1997（平成9）年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。伝統技術である土佐漆喰、水切り瓦、いしぐろ（防風の石垣塀）が随所に見られる。

高知の西、いの町は土佐和紙の産地。土佐藩の特産品として発展した和紙は、この地に植生する椿（こうぞ）を使って開発されていった。いの町出身の上田堯世の土佐和紙工芸村、紙の博物館がある。

高知の東には、高知城下とならぶ商業都市・赤岡町があり、商家や蔵が一部残されている。かつて長宗我部水軍の拠点で、江戸期には参勤交代や沿岸航路の宿場町として、さらに塩の産地としても栄えたまちだ。この旦那衆が依頼して描かれた芝居絵屏風を収蔵する絵金蔵や芝居小屋・弁天座にも注目したい。

もちろん全国的に話題になった現代建築も必見だ。坂本龍馬記念館を筆頭に、高知県立美術館、アンパンマンミュージアム、牧野富太郎記念館など、90年代に名作が次々と誕生している。

写真｜小松正樹（特記以外）

01
豊永郷民俗資料館
設計｜上田建築事務所　竣工｜2015年
大豊町粟生158
吉野川に面した山間地に、豊永郷と呼ばれる地域がある。その中心に位置する定福寺の境内に立つ資料館。圧巻なのは、約12,000点にのぼる周辺地域の民具の展示だ。「定福寺は吉野川流域で唯一、郷の人の嘆願で廃仏を免れた寺です。民具は先々代が収集を始め、限界集落と呼ばれたこの地域の文化を未来へつなげるために資料館を開設したんです」（釣井龍秀住職）。住職自ら学芸員の資格をとり展示を計画。土佐漆喰、腰壁の瓦、町産材を使ったダイナミックな肘木構造の建築自体も伝統文化を伝える展示のひとつだ。使われた技、職人を紹介するパネルも並ぶ。隣接する宝物殿も同設計者による。第2回JIA四国建築賞 大賞ほか受賞

02
香美市立やなせたかし記念館 アンパンマンミュージアム
設計｜古谷誠章+八木佐千子+NASCA
竣工｜1996年
香美市香北町美良布1224-2

同市出身の漫画家・やなせたかしの創作世界を収集・展示する文化施設。建物を大きくくり抜いた3層吹き抜けのエントランスホールを抜け、周囲の景観や大小さまざまな仕掛けに興じながら、設計者が「全館を立体的な迷路のようにデザインした」（公式ガイドブックより）と語るように、展示室、シアター、ときに屋外へと導かれる。外壁に土佐漆喰と現代的な水切りを施すなど地域性も表現。屋外のランドスケープとともに、屋上に不定期で登場するアンパンマンにも注目。隣接する「詩とメルヘン絵本館」（1998年竣工）も同設計者による。2000年日本建築学会作品選奨、第9回公共建築賞優秀賞受賞
※画像はすべて©やなせたかし ©やなせたかし／フレーベル館・TMS・NTV

03
▶p.08参照
高知県立中芸高等学校格技場
設計｜山本長水建築設計事務所
竣工｜1995年
田野町1203-4

04
小規模多機能施設 ゆずの花
設計｜艸建築工房　竣工｜2018年
北川村野友甲716-1
在来工法の宿泊棟と、CLT工法の交流棟の2棟からなる簡易宿泊施設。交流棟内部には、交互に組み合わせたCLTパネルが天井仕上げを兼ねた伸びやかな空間が広がる。施設は豪雨時の孤立者発生に備える宿泊所として計画され、交流機能を加えて現在の形に。「災害時だけでなく、軽度な見守りが必要なとき、あるいは学習スペースとしてなど、さまざまな活用を企画していきたい」（北川村役場 住民課 濵渦朋裕課長）。イベントも積極的に行い、村の人口約1,000人に対し、年間の利用者は延べ4,000人にものぼる。外壁のいしぐろ塀と瓦屋根、土佐漆喰も、風景に溶け込む。第17回高知県木の文化賞ほか受賞

05
▶p.04-07参照
室戸市吉良川町重要伝統的建造物群保存地区
室戸市吉良川町

06
▶p.11参照
土佐和紙工芸村くらうど
設計｜上田建築事務所
竣工｜1995年
いの町鹿敷1226

07
▶p.09参照
いの町 紙の博物館
設計｜上田建築事務所
竣工｜1985年
いの町幸町110-1

08
▶p.09参照
高知学芸高等学校 創立50周年記念体育館
設計｜上田建築事務所
竣工｜2007年
高知市槇山町11-12

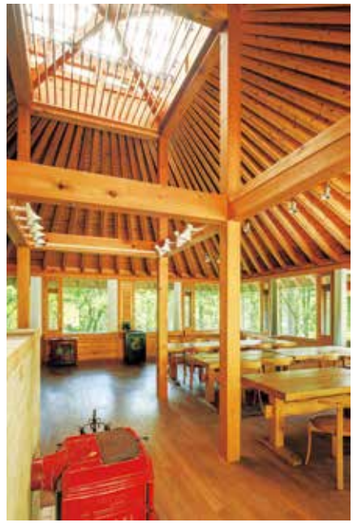
09
旭浄水場
設計｜和田忠治／東京工務所
竣工｜1925年
高知市旭天神町184

四国では高松に次いで2番目にできた、上水道を支える浄水場施設。高知大空襲の直撃を免れ、創設期に建築された赤い六角形の塔をもつ管理棟、赤煉瓦の送水所、計量所などが残る貴重な水道施設群だ。古くから桜の名所としても知られ、緩速濾過池の水面に樹々とともに映り込むルネサンス様式の送水所の姿は、市民に親しまれてきた存在だ。2005年から全面更新工事を実施。緩速濾過池は廃止されたが、管理棟や送水所などは保存が図られている。2008年土木学会選奨土木遺産

10
▶p.12参照
オーベルジュ土佐山
設計｜細木建築研究所
竣工｜1998年
高知市土佐山東川661

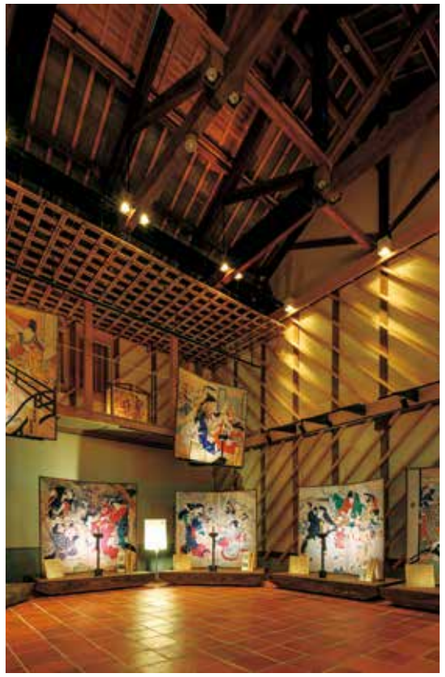
11
細木建築研究所アトリエ
設計｜細木建築研究所
竣工｜2002年
高知市みづき1-301
土佐派の建築家・細木茂のアトリエ。高知の伝統工法を現代建築に活かした典型的な例だ。外壁に土佐漆喰を使い、中段にステンレスの水切りをつけている。しかし1階はすべて細い鉄骨で支えられた駐車のためのピロティで、見晴らしのよい三方は全面のガラス張り。空間構成は現代に求められる機能に忠実に応えている。一見近代建築の典型にも見えるが、フラットルーフは軒を深くして雨を避けるなど、地域性の高い建築で、そこに新しさがある。竣工から20年以上。一切手を入れていないという外壁の漆喰の美しさが際立つ

12
相愛本社社屋
設計｜山本長水建築設計事務所
竣工｜1996年
高知市重倉266-2
都市計画区域外の山里の斜面に、土木系調査コンサルティング会社の社屋群が立つ。「素直に建て、穏やかな家並みのつながりをつくろう」（山本長水『建築家の土着』）と、造成工事は最小限とし、建物は地形や等高線に応じて分棟配置。木造2階建ての事務棟が折れ曲がって立つのは、そのためだ。その1階は、斜面に埋れた半地下構造とし、地中熱を利用して安定した温熱環境を得ている。屋根は一部ガラス瓦、壁には土佐漆喰、木材は地場産材だ。社屋自体が、循環型社会実現に向けた実践の場であり、植生の温存は、地目を山林として登記できるため固定資産税を抑えることにもつながっている。1998年日本建築学会作品選奨ほか受賞



13
▶p.10参照
土佐山田の舎（や）／Gallery樹下（こした）の舎（や）
設計｜聖建築研究所（改修、増築）　改修｜1990年　増築｜2002年
香美市土佐山田町東本町5-2-11

14
絵金蔵
設計｜不詳　改修設計｜若竹まちづくり研究所・聖建築研究所
竣工｜1929年　改修｜2005年
香南市赤岡町538
県の保護有形文化財に指定された芝居絵屏風の収蔵、展示施設。観光拠点として鉄筋コンクリート造の展示施設が計画されたが、住民の提案で、すでに町内の催し物を行っていた元農協の米蔵の改修に変更された。収蔵の絵は、幕末から明治にかけて赤岡の商家が元狩野派絵師・弘瀬金蔵に依頼した芝居絵。多くは奉納されており、「須留田八幡宮神祭」とそれにならって商店街で催される「絵金祭り」のときに商家の軒先で開帳される。祭りの夜に蝋燭の灯りに浮かぶ絵は幽玄で、レプリカの展示空間がその雰囲気を伝えている。「絵金」は「絵師・金蔵」に由来する呼び名



15
弁天座
設計｜若竹まちづくり研究所・聖建築研究所
竣工｜2007年
香南市赤岡町795

赤岡町には明治期に商家の旦那衆が建てた芝居小屋があったが、1970年代に閉館。これが住民の熱意で再生されたもの。しかし当時の資料や写真は一切残っておらず、四国こんぴら歌舞伎の「金丸座」を参考に回り舞台と升席が設計された。これまで絵金祭りに元農協の米蔵で上演されていた土佐絵金歌舞伎の新たな活動拠点。再建の原動力となったのが、大正時代から親しまれてきた銭湯・旭湯。コミュニティの拠点であり、1990年に廃業してから2007年に解体されるまで、演芸や催し物に利用されてきた。弁天座事務所棟にはこの旭湯の暖簾や番台、下駄箱などが転用されている

16
前浜掩体群（えんたい）
設計｜不詳　竣工｜1944年
南国市前浜
水田地帯に現れるコンクリートの塊。第二次世界大戦中に使用された、敵襲から軍用機を守る格納庫だ。一帯は、高知龍馬空港の前身、高知海軍航空隊基地の建設にあたり、軍の強制的な土地買い上げによって約1,500人が転居を余儀なくされ、村が消滅した歴史をもつ。コンクリート、木や竹、土製の大小41基の掩体がつくられ、コンクリート製の7基が現存。1号掩体には米軍機が機銃掃射した弾痕が残る。公園として整備された5号掩体では、子どもたちが楽しげに駆け回る姿が見られる。戦争の歴史をいまに伝える存在だ

17
▶p.13参照
称名寺本堂（しょうみょうじ）
設計｜山本長水建築設計事務所
竣工｜2001年
高知市升形8-19

18
高知県立文学館
（旧・高知県立郷土文化会館）
設計｜MA設計事務所
竣工｜1969年
高知市丸ノ内1-1-20

高知城の城郭内。その木立の中に石張りの建築が立つ。郷土の文化の容れ物として、当時の高知の建築界を代表する地元建築家・MA設計事務所が手がけた建築だ。1997年に内装を一新し文学館となったが、高知で採れる五色の石をコンクリートに打ち込み、サンドブラストした外壁は、竣工時のままだ。その圧倒的な外壁の存在に目を奪われるが、中庭に水切り瓦、なまこ壁がついた土蔵壁が現れ驚く。竣工時からツタはさらに緑を増した。土着性とともに神代雄一郎のいう「建築デザインのポップアート」（『新建築』1970.3）がここにある。庭の彫刻は、文学館になることを記念して設置された流政之の作品「土佐文学塚」

19
高知城歴史博物館
設計｜日本設計・若竹まちづくり研究所共同企業体
竣工｜2016年
高知市追手筋2-7-5
毎週日曜市が催される追手筋に面した、高知の歴史資料を収蔵・展示する博物館。土佐由来の菱形模様をかたどったスチールフレーム、江戸時代の船板塀の模様を洗い出した湾曲するプレキャストコンクリートは、土佐の荒波に浮かぶ船をイメージしたもの。内部の土佐ヒノキの集積壁、土佐和紙、漆喰壁なども見どころだ。博物館機能だけでなく、人々の交流の場としてピロティには休憩所、3階には高知城を一望できる展望フロアがあり、付近の探索拠点ともなっている。第12回日本漆喰協会作品賞、第59回BCS賞ほか受賞

20
高知県立 高知追手前高等学校本館
設計｜高崎正隆（県営繕技師）
設計指導｜武田五一
竣工｜1931年
高知市追手筋2-2-10

日曜市でにぎわう追手筋を行き来していると、堂々たる白亜の建物が目にとまる。鉄筋コンクリート造3階建て、左右対称の建物の中央に和風の宝形屋根を載せた時計台がそびえる帝冠様式の建築だ。同校の卒業生である武田五一が設計指導にあたり、時計台は建て替え前の木造校舎の時計台を模したとされる。物理学者の寺田寅彦、漫画家のやなせたかしも同校の出身。彼らも、まちのシンボルとして親しまれてきた時計台を眺めたことだろう。建物は学校建築として、高知県内で初めての国の登録有形文化財

21
新京橋プラザ
設計｜荒木正彦設計事務所　竣工｜1995年
高知市帯屋町1-11-40
高知市の中心部、はりまや交差点からほど近い公園に隣接して、浮遊感のある流線型の建築が立つ。青空駐輪場の再整備にともない計画された交流施設で、地下に駐輪場、階段を上ると屋上庭園があり、大通りをまたぐ既存の歩道橋と連結するインフラ機能も有した建築だ。トップライトからの光が印象的な内部は、当初、多目的施設として多様なプログラムに対応できるよう計画され、現在は、高知県の特産品を取り揃えたセレクトショップが入る。彫刻的でありながら、周囲の行き交う人の流れを自然に受け止める建築だ。第12回高知市都市美デザイン賞受賞

22
▶p.06参照
はりまや橋商店街 木造アーケード
設計｜艸建築工房・西森啓史建築研究所
竣工｜1998年
高知市はりまや町1

23 24
藁工ミュージアム、蛸蔵（たこぐら）
全体統括｜竹原義二／無有建築工房　設計｜竹原義二／無有建築工房（藁工ミュージアム）、しば建築設計室（蛸蔵）
竣工｜1948年ごろ　改修｜2011年
高知市南金田28
江の口川のほとりには、いまも土佐漆喰と水切り瓦がごく一般的だった時代につくられた木造倉庫群が残る。戦後間もなく建てられ、藁製品の保管に使われた土蔵だ。それら倉庫の一部を再生し、全国で2番目のアール・ブリュット美術館（写真下、上中央）と、多目的空間・蛸蔵（写真左上）が誕生した。蛸蔵は本格的な劇場空間としての空間構成をもたせ、音響・照明設備を充実させた。ミュージアムに新たに挿入された不揃いなヒノキの角材を積み上げた展示壁は、耐震補強も兼ねている。傷んだ外壁は、伝統的な技法によって修復。時を経るごとに色が馴染んできたという。2棟を結ぶ広場に敷き詰めたイギリス産のアンティーク煉瓦との対比も美しい。藁工ミュージアムは休館を挟み、新たな運営体制のもと活動を再開。企画展も楽しみだ　※ミュージアムは不定休。詳細はウェブサイト参照

25
▶p.09参照
高知県立美術館
設計｜日本設計・環境建築設計事務所・山本長水建築設計事務所
竣工｜1993年
高知市高須353-2

26
牧野富太郎記念館
設計｜内藤廣建築設計事務所
竣工｜1999年
高知市五台山4200-6
五台山にある牧野植物園に付帯する、博士の業績を顕彰する施設。斜面に分散配置された本館と展示館の2棟を回廊がつなぐ構成だが、生い茂る樹木に覆われ建築の全容をつかむことはできない。だが、これこそ設計者が当初から願った姿だ。高知の厳しい自然環境に対して、外部に対して閉じ、内部に対して開く、低く大地に伏せたような造形と配置。中庭に張り出した大屋根の下には、のびやかな半屋外空間が広がる。地場産材の活用と自然との共生、最新のコンピュータ解析技術と土佐の伝統技術が凝縮されている。駐車場にある公衆トイレも同事務所の設計。第13回村野藤吾賞、土木学会デザイン賞2006最優秀賞ほか受賞

27
竹林寺本坊・庫裏
設計｜堀部安嗣建築設計事務所
竣工｜2019年
高知市五台山3577
緑に包まれた静謐な五台山の頂に724年に開創された竹林寺は、四国霊場第31番札所であり、多くの参拝客や観光客が訪れる。その本坊と庫裏が生まれ変わった。工事は2期に分け、敷地の高低差、さまざまな機能や動線を一体的に計画。地上にあった位牌堂は地下に収め、かつての動線を継承した通路広場を設けた。屋根の架かったこの広場は、駐車場から境内に至るメインアプローチであり、休憩所として人々を迎え入れる。敷地東側に広がる牧野植物園と寺を回遊する人の流れも生まれはじめた。国の重要文化財である本堂と書院、国の名勝に指定された庭園も巡りたい。境内の奥に立つ納骨堂（2013年竣工）も同設計者による